

期待を担い 2氏巣立つ

関西電力が地域共生活動の一環として運営する嶺南医療振興財団（理事長＝岡田雅彦常務執行役員・原子力事業本部地域共生本部長）。同財団の奨学生2人が今年4月、地域医療の現場へと巣立った。杉田玄白記

念公立小浜病院（福井県小浜市）での勤務を始めた大江秀樹医師（泌尿器科）、鋸谷麻紗巳医師（小児科）に話を聞いた。同財団の概要、岡田理事長ら関係者のコメントと併せて紹介する。

働きやすい環境を整える



吉田 治義氏
杉田玄白記念
公立小浜病院長

医師確保は病院運営の根幹をなす重要課題だが、新臨床研修医制度の開始を端緒とする医師不足は地方の病院において顕著になっている。この数年、当院では県などの支援を得て診療機能の高度化を進め、ハード的には地域の基幹病院として必要とされる機能はほぼ

整備されたと考えている。しかしながら医師不足の解消は容易ではなく、一部診療科の縮小を医師不足解消による医療水準の向上を目的とした

教育と研修 体制を強化

松崎 晃治氏
公立小浜病院組合長
小浜市長

住民の皆さまの医療に寄せる期待がますます増大している中、医師の偏在はなお加速しており、小浜病院においても外来診療などの縮小を余儀なくされている。

嶺南医療振興財団が設立された。これは誠に時宜が4月から当院の小児科と泌尿器科で勤務をから感謝申し上げる。お二人の先生には当該において専門分野の研

嶺南医療振興財団が設立された。これは誠に時宜が4月から当院の小児科と泌尿器科で勤務をから感謝申し上げる。お二人の先生には当該において専門分野の研

嶺南医療振興財団が設立された。これは誠に時宜が4月から当院の小児科と泌尿器科で勤務をから感謝申し上げる。お二人の先生には当該において専門分野の研

嶺南医療振興財団が設立された。これは誠に時宜が4月から当院の小児科と泌尿器科で勤務をから感謝申し上げる。お二人の先生には当該において専門分野の研

嶺南医療振興財団が設立された。これは誠に時宜が4月から当院の小児科と泌尿器科で勤務をから感謝申し上げる。お二人の先生には当該において専門分野の研

嶺南医療振興財団が設立された。これは誠に時宜が4月から当院の小児科と泌尿器科で勤務をから感謝申し上げる。お二人の先生には当該において専門分野の研

嶺南医療振興財団が設立された。これは誠に時宜が4月から当院の小児科と泌尿器科で勤務をから感謝申し上げる。お二人の先生には当該において専門分野の研

嶺南医療振興財団が設立された。これは誠に時宜が4月から当院の小児科と泌尿器科で勤務をから感謝申し上げる。お二人の先生には当該において専門分野の研

理事長 岡田 雅彦氏 地域への定着化、課題



嶺南の地域医療を担う月を要し勤務医が誕生し医師確保を目的に創設したことに喜びを隠せな

これまででは医師の確保に重点を置いてきたが、これからはいかに嶺南地域への定着化を図るかが課題となる。

延べ47人に奨学金を貸与

嶺南医療振興財団は2007年3月に発足。福井県嶺南地域における医師確保対策として、奨学金などによる人材育成支援制度を導入することを保は全国的にも深刻な課題

嶺南地域の医療機関で臨床研修2年経過後、原則として新たに4年間勤務すれば返済が免除される。

2007年3月発足
地域医師確保へ

信頼される 模範医師に

米村 小夜子氏
福井大学学務部松岡
キャンパス学務室長

医師を今年度は14人派遣し、医療体制の充実を努めている。嶺南医療振興財団奨学生の勤務開始は、地域医療に大きな意義のあるところであり、現場で住民に寄り添い活躍されることを期待している。

最初の奨学生とあって、私たちが学務室職員も期待と不安で複雑な心境であるが、必ず皆さまに信頼される医師となり、

また、これから後に続く奨学生の模範となっていくことを確信している。

奨学生を温かく支えて頂いた関係者の皆さまに深く感謝したい。(談)

2人の医師が勤務する杉田玄白記念公立小浜病院



主治医としての執刀も 少しずつ体験を積んで



大江 秀樹医師 泌尿器科

——実際に医療現場で
働いてみるの感想は。
「昨年度までは大学で
勤務していたし、4カ月
ほど、泌尿器科の実務も
経験した。4月以降、環
境が変わったので、最初
は戸惑うことも多かった
が、今はだいぶ慣れてき
た。手術の際、主治医と
して執刀することもある
が、先輩たちに教えても
比較的のんびりとした楽
しい学生時代だったと思
う」
——都市部の大きな病
院ではなく、地域の医療
機関で働くことになった
きっかけは。
「私の出身は敦賀市。
いずれ地元の嶺南で働き
たいと考えていた。まず
は福井大学の医局に入る
のが嶺南で働く道になる
と思った。大都市での勤
務はあまり考えていなか
った。高校生の頃、福井
大学医学部の先生から話
を聞く機会があった。も
ともと理系だったが、何
を専攻するかは決めてい
なかったが、福井大学の
先生の話聞いたことが
(医師になること)大
きな影響になったと思
う。嶺南医療振興財団は
親せきから教えてもらっ
た」
——患者と接する上で
心掛けていること、また
仕事の喜び、つらい点な
どは。
「どうしても『若い先
生』とみられることがあ
る。先輩たちは経験値
が違うため、信用しても
感がある。患者さんは幸
い、医師の言うことをよ
く聞いてくれる。小浜病
院の職員の方々も親切
で、いろいろな助けても
らっている」

鋸谷 麻紗巳医師 小児科



自分で判断、責任の重さ 子どももの目線、受け止め

——いよいよ実戦の舞
台。感想は。
「少しは慣れてきたが、
力不足を感じることもた
くさんある。研修医とは
違い、自分で判断しな
ければならない立場なの
で、責任の重さを実感し
ている。先輩医師を頼り
ながら仕事をこなしてい
る。奨学生の期間を振
り返すの思いは出た。
マラソン大会に参加した
ら、私自身も県内の市民
マラソン大会に参加した
りていた」
——都市部ではなく、
あえて地域の医療機関で
勤務しようと思ったのは
なぜか。
「福井大学につながる
のある病院を考えた。私
は高浜町の出身。あえて
福井から出ようとは思わ
なかった」
——患者と接する上で
心掛けていること、また
仕事の喜び、つらい点な
どは。
「小児科医として子ど
もの目線を大事にしてい
る。また、(子どもを連
れてくる)家族のお話を
しっかりと聞くことを心
掛けています」
——仕事を通じて喜び
高浜町から知り合いが
と声を掛けてくれるとき
は喜び。一方で、技術は
簡単に身につくものでは
なく、できないこともま
だ多い。そういう時は「先
は長いな」とも感じてし
まう」
——小浜の印象は。
「地元の人が多い
て、おちおちな人が多く
よびに思う。患者さんも
そう。言葉のイントネー
ションも似ていて、親和
感がある。患者さんは幸
い、医師の言うことをよ
く聞いてくれる。小浜病
院の職員の方々も親切
で、いろいろな助けても
らっている」